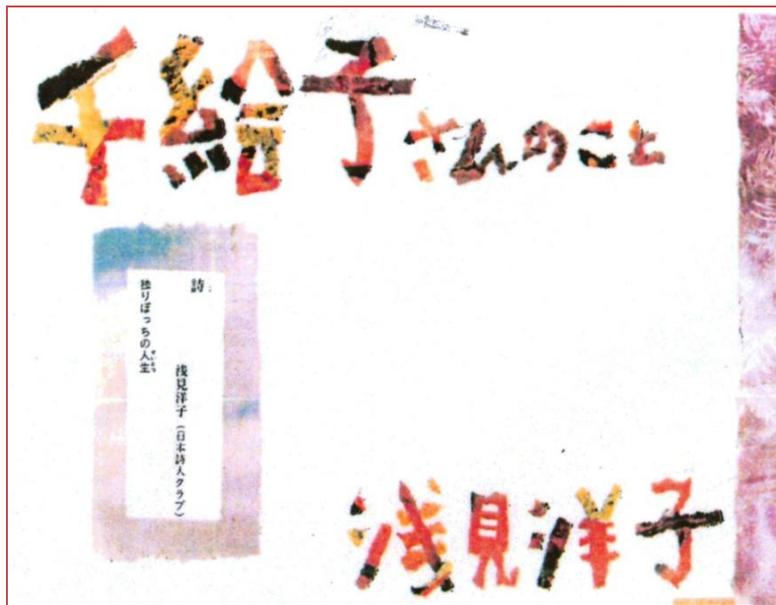


## 独りぼっちの人生

詩 浅見洋子(日本詩人クラブ)  
絵(水切り絵) 森田みどり

水切り絵とは一  
新聞紙のカラーページを  
水を含ませた筆でなぞり  
手でちぎって、貼って作る  
切り絵です



3月1日 六歳の誕生日をむかえた千絵子は  
深川で三月十日の東京大空襲にみまわれ  
両親と二人の兄弟を亡くした



あの日 12歳の姉に背負われ  
千絵子が目にした光景は  
焼けて小さくなった黒い死体が  
道いっぱいに折り重なり  
人が歩ける分だけ脇にどけられていた  
まさに地獄だった



十二歳の長女と十歳の長兄 千絵子が生き残った翌日3人は 別々の親戚に 引き取られた その日から 千絵子の孤独との戦いが始まった

12歳の長女と10歳の長兄 千絵子が生き残った翌日3人は 別々の親戚に 引き取られた その日から 千絵子の孤独との戦いが始まった



六歳の千絵子は 労働力には ならない 役にたたない 彼女の 食事は 芋一個か 一握りの ご飯だけ みそ汁の味も お新香の味も 知らない 夜に 徳利を 持てない 千絵子は 夕日に 向かい お父ちゃん！ お母ちゃん！ 独り 泣き叫んでいたと言う 土手の 夕日が 沈むころ そとと帰り 部屋の隅に 隠れるように 座っていた

六歳の千絵子は 労働力には ならない 役にたたない 彼女の 食事は 芋一個か 一握りの ご飯だけ みそ汁の味も お新香の味も 知らない

家に 居場所を持たない 千絵子は 夕日に向かい お父ちゃん！ お母ちゃん！ 独り泣き叫んでいたと言う 土手の夕日が沈むころ そとと帰り 部屋の隅に 隠れるように座っていた



小学校に入り 姉の居場所が 知らされた 学校で必要な一切を 姉から 貰うためにだ 小学校を出た 姉は すでに 女中奉公で 給金を貰い 食べることもできていた 長く伸びた 黒い影が 田畑にとけこみ 夕日の落ちた 畦道を 千絵子は 姉の所に行かなくてとはと 心細さに ふるえ 涙をこらえ 一心に 歩いたものだ と 話した

小学校に入り 姉の居場所が 知らされた 学校で必要な一切を 姉から 貰うためにだ 小学校を出た 姉は すでに 女中奉公で 給金を貰い 食べることもできていた 長く伸びた 黒い影が 田畑にとけこみ 夕日の落ちた 畦道を 千絵子は 姉の所に行かなくてとはと 心細さに ふるえ 涙をこらえ 一心に 歩いたものだ と 話した

小学校に入り 姉の居場所が 知らされた 学校で必要な一切を 姉から 貰うためにだ 小学校を出た 姉は すでに 女中奉公で 給金を貰い 食べることもできていた 長く伸びた 黒い影が 田畑にとけこみ 夕日の落ちた 畦道を 千絵子は 姉の所に行かなくてとはと 心細さに ふるえ 涙をこらえ 一心に 歩いたものだ と 話した

明るい時間に 姉の所に着くと 家に返されるので 夕日を背に 暗くなってから 辿りつくようにと 子どもなりの 知恵だったと 苦笑する 63年経った いまも 夕日は 千絵子を 幼い日の 不安で寂しかった日々にと 引き戻す



やせ細りお腹が膨らんだ 小学校三年の 千絵子  
見かねた 近所の人が 子守の世話をしてくれた  
子守先の家で 初めて 家族と同じ食事をした彼女  
喜びと安堵の中 生きねばならないことを受け入れた

やせ細りお腹が膨らんだ 小学校三年の 千絵子  
見かねた 近所の人が 子守の世話をしてくれた  
子守先の家で 初めて 家族と同じ食事をした彼女  
喜びと安堵の中 生きねばならないことを受け入れた



二二歳 三度の転校後 夜間中学校を卒業  
取得した和文タイプの資格をもち 就職活動が  
面接で 高校も出ていない者に  
タイプを打てるはずがないと 資格を否定された  
彼女は 迷わず 夜間高校に進んだ  
両親や保証人のいない 彼女につきまとった差別

24歳 3度の転校後 夜間中学校を卒業  
取得した和文タイプの資格をもち 就職活動が  
面接で 高校も出ていない者に  
タイプを打てるはずがないと 資格を否定された  
彼女は 迷わず 夜間高校に進んだ  
両親や保証人のいない 彼女につきまとった差別



34歳になった 千絵子に 縁談話きた  
2歳になった男の子を 残し  
妻に先だたれた男との 縁談だった  
黄色くくすんだ顔手足の垢は 痂になっていた  
彼女は 幼い日の自分を 重ね見た

34歳になった 千絵子に 縁談話きた  
2歳になった男の子を 残し  
妻に先だたれた男との 縁談だった  
黄色くくすんだ顔手足の垢は 痂になっていた  
彼女は 幼い日の自分を 重ね見た

私の命を この子にあげようと  
この男を 慈しみ育てる 母の道を選んだ



—私は 今でも 夕日が 嫌いです

語気を強め 言い切る 石田千絵子 六九歳  
東京大空襲訴訟で 証人尋問にたつ 彼女  
打合せ場所を わが家にした 代理人の夫  
二人の 傍らで 茶を入れながら  
わたしは 彼女の話に 聞き入った



出された茶には 手をつけず 淡々と話す彼女  
53歳で蜘蛛膜下出血し 後遺症があるそうだ  
閉ざしていた 心の扉を開き 語り出した彼女  
6歳で止まった 壊されたままの 心の時計  
不安と恐怖と怒り 家族を慕う 狂おしい孤独



わたしは 涙を押しかくし  
新しい茶を 入れかえながら  
彼女の心の 癒される日が来ることを  
千絵子さんの怒りが 解かれる日を 願った